

牧野貴 — 無意志的記憶または予感の芸術

私たちには、牧野貴がいる。

私たちは、牧野貴と同じ時代に生きている。

牧野貴が生み出した作品たちを、私たちは体験することができる。

いま、ここに、生成する奇跡を、見逃すな。

至福の体験。2023年8月25日から9月3日まで、横浜のBankART Station Theaterにおいて開催された、「牧野貴 レトロスペクティブ 2002-2020」。初期作品から近年の作品まで、約40本から選ばれた、全6プログラム20本の特集上映は、牧野貴の映像が、比類なき圧倒的なクオリティを湛えていることを、世界に向けて、堂々と発信していた。牧野の映像を見る体験、それは、夢の中で夢を見ているような体験であり、同時に、覚醒の只中で覚醒しているような体験でもある。この10日間、BankART Station Theaterは、間違いなく、世界最高峰の上映空間であった。私はそのことを確信しており、そのことを誇らしく思う。

言葉が見つからない。牧野の素晴らしい映像を、短期間に20本も見るといって、至福の体験。牧野の映像は、初めて見る作品はもちろん、すでに見たことがある作品であっても、そのたびごとにリアルな体験として、一本一本の映像が、圧倒的な衝撃とともにやってくる。迎え撃つ準備をしたつもりでも、なす術なく、めくるめく光の明滅と音響の渦に巻き込まれ、陶然としたまま、別世界の時空を彷徨っている。何を見ているのか、どれくらい時間が経ったのか、自分がどこにいるのか、わからない。気がつけば、現実界へと戻されていて、終わりの瞬間は、いつも、時空の異なる世界を旅してきたような感覚に、包まれている。

思考の断片を放り投げるくらいはできる。アブストラクトなノイズのように見える牧野の映像は、しかし、カメラによって撮影された映像がベースである。撮影時には多重露光が多用され、フィルムからデジタルへの変換過程においてもアクロバティックな手法が駆使され、光、色彩、速度感といった要素が、それぞれの独自性を発揮しながら、時間軸に沿って編集される（現在は撮影もデジタルである）。撮影によって得られた画像には明暗があるが、多重露光やデジタル処理によって別な画像が重なり明暗が細かく分割される。この工程が重ねられると、画像の明暗はさらに細かく分割され、やがて光の粒子のように見えてくる。

正と反とを同時に求める衝動と欲望。多重露光による手法を極限まで突き詰めることで「完全なカオス」を生み出すことを意図して制作された映像は、その目的と反対の「コスモスの誕生」に到達し、2009年に完成したその作品は、《still in cosmos》と命名された。カオスを求める衝動がコスモスを誕生させる、そこに、正と反とを同時に求めるバロック的な欲望を見いだすこともできるだろう。入力と出力がループすることで発生するフィードバック・ノイズのような映像は、パンク、ニュー・ウェイヴからノイズ、インダストリアルという時期の音楽を俯瞰する「サイケデリック・バロキスム」（阿木譲）という概念を想起させる。

コスモスとアンチコスモス。今回の個展のタイトルは「Collage and Anti-cosmos」であり、展示の中心となる新作の映像は、《Anti-cosmos》と命名されている。牧野が触発された井筒俊彦の『コスモスとアンチコスモス』も、牧野の《still in cosmos》と《Anti-cosmos》も、正と反とを同時に求めるバロック的な欲望と共鳴しているのかもしれない。《Anti-cosmos》においては、圧倒的な速度感は抑制され、画面の中心から放射される霧の中に分け入るような感覚が特徴となっており、風景などがおぼろげに感じ取れる時もある。驚くべきことに、そのめくるめくような感覚から想起されたのは、2002年の初期作品《EVE》であった。

最初から圧倒的なのだ。多重露光の多用がもたらす光の粒子は、木漏れ日や雨粒や粉雪のようにも見え、牧野が撮影する樹木や水面のきらめきを想起させる。牧野において、撮影と編集は入れ子状の関係、合わせ鏡の関係にあるといえるかもしれない。そのことは、編集機材を持っていなかった牧野が、16ミリによる撮影と現像のみで完成させた2002年の初期作品、《EVE》にして、すでに明らかである。編集という工程は撮影という行為に組み込まれており、撮影＝編集として成立している。つややかで、なめらかで、時に硬質な、光の愛おしさ、まるでフィルムが呼吸しているような、圧倒的な感覚に溢れているのだ、最初から。

こんな風に見える訳がない。前述した特集上映では2本の3D作品、《2012》(2013)と《cinéma concret》(2015)が上映された。片目を暗くすることで知覚の時間差が生じ、右目を暗くすれば左から右へ、左目を暗くすれば右から左へ、流れるような3D映像が知覚される。その映像は、驚嘆すべき透明さを湛えており、奥の方では前述した方向と逆方向の流れが見えてくる。まるで巨大水槽の中のメリーゴーラウンドのように回転する映像に圧倒されていると、いつしか、そのメリーゴーラウンドに乗せられていて、回転するダイナミックな映像の渦の只中にいる、こんな風に見える訳がない、これは夢なのか予感なのか。

夢は記憶のコラージュ。牧野の初期のコラージュ作品(2002-2003)の一部は、第11回恵比寿映像祭「トランスポジション 変わる術」(2019)において展示された。この時のトークにおいて、牧野は、夢とは記憶のコラージュなのではないかと述べ、初期のコラージュが、映像制作に本格的に取り組む前に手がけられたものであると語っていた。ここで興味深いのは、《still in cosmos》と《Anti-cosmos》も、「コスモスとアンチコスモス」も、今回の展示のもうひとつの主演である、コラージュ作品をとらえる視点へと接続できることである。(新作映像とコラージュ作品についての説明は牧野のステートメントを参照いただきたい。)

コラージュは無重力。今回、初期のコラージュも出品されるが、展示の中心は、コロナ禍の時期に集中的に制作されたコラージュであり、かなりの点数が展示されると聞いている。展示予定のコラージュのイメージを10点ほど見ることはできたが、いずれも素晴らしく、牧野はコラージュにおいても炸裂している。牧野のコラージュは、矩形のフレームの内側へと向かう凝集力が凄まじく、その凝集力は、画面に鉱物的な感覚を漲らせている。そして、その凝集力が極点において反転し、硬質な質感を湛えたまま、無重力空間を飛翔するかのような、柔らかく滑らかなイメージが肌を撫でてゆく。驚くべき感性というしかない。

ユートピアとディストピア。その感覚に浸りながら、コラージュを手がけた作家について思いをめぐらせていると、凝集力においては瑛九が、無重力空間への飛翔においては岡上淑子が、想起された。二人のコラージュは、海外でも評価されており、瑛九のコラージュはロサンゼルスのカウンティ・ミュージアムが組織した「DRAWING SURREALISM」(2012-2013)に出品されており、岡上のコラージュはヒューストンのミュージアム・オブ・ファイン・アーツが組織した「UTOPIA|DYSTOPIA Construction and Destruction in Photography and Collage」(2012)に出品されている(同美術館は2002年に岡上の個展を開催)。

偶然の拘束。岡上のコラージュが出品された後者の展覧会の図録に収録された論考のタイトルにも「Dream and Disaster」という対比が示されている。「コスモスとアンチコスモス」とパラレルにとらえることが可能な、「UTOPIA|DYSTOPIA」、「Construction and Destruction」、「Dream and Disaster」といった対比は、コラージュやモンタージュを俯瞰的にとらえるために提示された概念であるが、牧野のコラージュ作品へとアプローチする上でも、正と反の入れ子状の関係を示唆する論点として機能するだろう。また、コラージュの本質と原理を見事に言い当てた、「偶然の拘束」という岡上の言葉も参照したい。

手を動かす、コラージュ。コラージュにおける「凝集力」は「拘束」に由来し、コラージュにおける「無重力空間への飛翔」は「偶然」がもたらす想像力の飛躍に由来する。だからコラージュは「偶然の拘束」なのであるが、牧野もステイトメントで述べているように、コラージュは「手を動かす」ことによって成立する。だが、牧野はコラージュの成立に「手を貸している」とみなすべきである。コラージュの本質は、複数のイメージそれ自体が主役となり、互いの衝突と軋轢を制御し、ひとつの画面を生成する原理にある。コラージュは、表現者による制作行為を凌ぐ、自動筆記的な工程によって表出する、無意志的記憶なのだ。

手を動かす、映像。牧野はステイトメントの中でコロナ禍の時期に言及し、「手を動かし続ける」と書く。その言葉が喚起するのは、東京都庭園美術館の「IGNITION BOX 2016/17」において発表された、《ENDLESS CINEMA》(2017)。3面のスクリーンに映写される映像に耽溺していると、何か不思議な感じがする。気がつくくと、左右の映像が、中央の映像に重なるように、少しずつ、動いている。いつしか、中央のスクリーンに3つの映像が重なり、その後、再び、左右の映像が離脱を始め、3面の映写に戻る。鑑賞後、人の手でプロジェクターを動かしていると聞き、多重映写とでもいべきアナログな手法に、心底驚かされたのだった。

コラージュは多重露光。本格的な映像制作を開始する前にコラージュに取り組んだ牧野は、コラージュの原理から多重露光に可能性を見出したという。物理的に画像を組み合わせると重ねるコラージュは不透明だが、多重露光では、どれだけ映像を重ねても光の明滅が複雑化するだけで、イメージは透明である。だが、今回、牧野が開拓した境地、「コラージュの映像化」という手法が、新たな衝撃をもたらす。コラージュを素材とする新作の映像、《Microcosmos》。半透明化したコラージュの背後に水面のきらめきが見え隠れし、物質性から解き放たれたコラージュが、映像という無重力空間において、炸裂するように飛翔している。

上映と展示。牧野は、映像の制作のみならず、上映の実践にも力を注ぎ、発表の機会を自主的に作ることに取り組んできた。また、東京都写真美術館における恵比寿映像祭（プレイベントを含む）、URANO における個展（2018）、埼玉県立近代美術館における「New Photographic Objects」（2020）など、映像の展示に取り組む機会も得ている。牧野が向き合う映像の「上映」と「展示」は、「時間軸映像」と「空間軸映像」という原理的な問題を孕んでおり、表現者のみならず、プログラムをオーガナイズする側が真摯に取り組まねばならない課題である。同時に、上映と展示を包含する映像の原理的な批評を活性化しなければならない。

ずっとクライマックス。牧野は、世界各地の映画祭において数多くの賞を受賞しており、海外での作品上映の機会が多く、国際的な評価は極めて高い。さらに、映像の展示にも取り組むことにより、美術の領域においても、その比類なき映像にふさわしい評価を獲得することだろう。牧野は、鑑賞行為の制御が困難な映像の「展示」への戸惑いを吐露しつつ、「最初から最後までずっとクライマックスな映像を作ればいい」とも述べている。また、展示の開幕まで体験できないのがもどかしいが、牧野のステイトメントを参照すると、いつも素晴らしい牧野作品の音楽／音響が、今回も圧倒的であることを、私は確信している。

至福の体験、再び。2023年10月7日から11月4日まで、東京のANOMALYにおいて開催される、「Takashi Makino Collage and Anti-cosmos」。初期および近年のカラー作品と、新作の映像2本からなる展示は、その比類なき圧倒的なクオリティを、世界に向けて、堂々と発信するだろう。この期間、ANOMALY は、間違いなく、世界最高峰の展示空間のひとつとなることだろう。私はそのことを確信しており、そのことを誇らしく思う。そして、冒頭と呼応する結びにおいて、「私たち」と記される言の葉が、「牧野貴の作品たち」であることに、驚いている。牧野貴の作品たちが、あなたに囁く言の葉に、耳を澄ます。

私たちには、あなたがいる。

私たちは、あなたと同じ時代に生み出された。

牧野貴が生み出した私たちを、あなたは体験することができる。

いま、ここで、あなたの内に生成する奇跡を、見逃すな。

梅津元